

ルカ15章11-32節 「父の愛」

1A 初めからおられる方 1ヨハネ2:13

1B 教会から始まった父の日 エペソ3:15

2B 父なる神

1C 養う者 マタイ6

2C 治める者 1テモテ3

3C 厳かに命じる者 1テサロニケ2

4C 憐れみに深い者 ビリー・グラハムの娘

2A 放蕩息子と兄息子の父

1B 反抗する息子

1C 不敬:生前の相続分与

2C 放蕩

2B 受け入れる父

1C 我に帰る息子

2C 安定した家

3C 優しい父

3B 祝福する父

1C 完全な赦し

2C 息子への回復

4B 兄息子を宥める父

1C 反抗:家に戻らない兄

2C 家から出る父

3C 全てを与えていた父

本文

皆さん、おはようございます。本日は、父の日を記念した礼拝にいらして下さって、ようこそ。

1A 初めからおられる方 1ヨハネ2:13

1B 教会から始まった父の日 エペソ3:15

キリスト教会で、父の日をお祝いするということは、初めての方も多いかと思います。けれども、実は、母の日に並んで父の日は、教会から始まっています。今から 109 年前にアメリカの教会で始まりました。ですので、父の日を教会礼拝でお祝いするのはごく自然なことであり、その起源についてお話しできることは幸いです。

キリスト者にとって、いや、全ての人にとって「父」は身近な存在です。身近な存在と言っても、別にいつもそばにいるという意味ではありません。父がいても、まるで不在であったかのような家庭に育ったという方々も多いかと思います。私が身近だと言っているのは、父という存在は、良きにしろ悪しきにしろ、必ず意識して生きている存在だということです。なぜか？父をもって、全てが始まっているからです。「Iヨハ 2:13 父たち。私があなたがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。若者たち。私があなたがたに書いているのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。」もちろん母がいます、けれども父がいて、それで母が自分を産みました。例えば、オバマ前大統領について考えますと、彼の外交政策を論じた人が、生みの親であるケニア人の父との関係から論じていました。オバマ氏が二歳の時に離婚していて、オバマ氏が父に会ったのは 10 歳の時に一度だけということです。それにもかかわらず、オバマ氏の世界の見方が、父の政治思想に感化されていることを、自伝に残しているとのこと¹。このように、父は必ず自分にとって大きな存在になっています。

それは、父の存在を考える時に、実はその元になっている存在、神を思っています。聖書のエペソ書 3 章 15 節には、こう書かれています。「天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」すべての家族と呼ばれるものの元になっている方が、天地創造の神であるとのこと。そして天地創造の神ご自身が、父と呼ばれています。

2B 父なる神

1C 養う者 マタイ6

父は、どのような存在でしょうか？イエスが弟子たちに、日々の生活において、食べることで心配してはならないと言われて、その根拠をこう言われました。「マタイ 6:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたは、その鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。」養う存在です。一家が生きて行けるように、養います。午後に観る映画にも、日雇い労働者として働いている父の姿が出てきます。日々の糧を養い、子供、そして妻を養っていく姿、そこには空の鳥を生かしている父なる神の姿に重なります。

2C 治める者 1テモテ3

そして教会において、指導者、監督になる者の資格が、テモテ第一 3 章に書かれています。「3:5 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人でなければなりません。自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会を治めることができるでしょうか。」自分の家庭を治めることが、神の教会を治めることにつながっています。神は治める方です。同じように父という存在は、家庭に平和と秩序を保つように、家をよく治めるために存在します。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=3737>

3C 厳かに命じる者 1テサロニケ2

そして父は、威厳をもって勧め、命令する人であります。使徒パウロが、新しく信仰をもった人々に対して、こう言いました。「1テサ 2:11-12 また、あなたがたが知っているとおりに、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがた一人ひとりに、ご自分の御国と栄光にあずかるように召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。」母は、優しく養い育てる役割を担いますが、父は、勧め、励まし、そして厳かに命じる働きをします。

4C 憐れみに深い者 ビリー・グラハムの娘

しかし、家庭を養い、治め、そして厳かに命じるような父に、とかく置き去りにされている姿があります。それは慈悲深さです。今年 2 月、世界のキリスト教会で著名な伝道者である、ビリー・グラハムという方が亡くなりました。99 歳でした。聖書にある良き知らせ、福音を、これまで生きてきた誰よりも多く、世界中の人々に語ったと言われています。歴代のアメリカの大統領のそばに寄り添って、その悩みを聞いたり、祈ったりする人でもありました。それで彼が亡くなった時は、盛大な葬儀が行われました。一つは、ワシントン DC で政府が主催し、もう一つは故郷で行われ、そちらはグラハム家が主催しました。

その中で、息子さん、娘さんたちが前に出て父の思い出を話しました。ルツさんという方がいます。彼女は 21 年ぐらいの結婚生活が離婚に終わってしまいました。独り身になって、これから新しい生活を始められると思いました。引っ越して、新しい教会に通いました。そこに、妻に先立たれた一人の男性がいました。その人との付き合いがあまりにも早く進展したそうです、すぐ再婚する勢いでした。子供たちはその男を嫌がっていたし、遠くにいた母も父も、「ちょっと早すぎるのではないかな？もっとその人のことを、知ってからにしないと。」と助言したそうですが、「誰が、シングル・マザーの気持ちが分かるの？」と両親のことを思ったそうです。それですぐに結婚したそうです。すると、24 時間以内に、とんでもない間違っただけのことを気づいたそうです。数週間しかその結婚は続かず、彼女はその新しい夫から逃げて、二日かけて運転して、実家に戻ったそうです。この話をどうやって持ち出せばよいか？悩み苦しんだそうです。こんなことは、伝道者であるビリー・グラハムにとって、恥となるのではないかな？父に非常に申し訳ない気持ちだったそうです。

ところが、父ビリーは、家から出てきて立って待っていたそうです。車から出てくると、彼は両腕で抱いて、「お帰りなさい」と言ってくれたそうです。そこには恥も、非難も、責めもなかったということです。慈悲深い父の姿です。子の心は、父に対して初めは反抗心を持ち、次に会うのも恥ずかしいと思い、次にことごとく叱られ、怒られるだろうと思ったわけですが、父の心は変わらずに同じでした。²

² <https://ijr.com/2018/03/1072012-billy-graham-daughter-funeral/>

2A 放蕩息子と兄息子の父

今朝は、その慈悲深い父の姿を見ます。そして、聖書の神は慈悲深い神であり、私たちが反抗し、無視し、罪深くとも、父なる神が、悔い改めて戻って来る時に、どのように受け入れてくださるのかを見て行きます。

1B 反抗する息子

1C 不敬:生前の相続分与 11-12

11 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。12 弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。

弟息子が、父の生前になんと財産分与を要求しています。こんなことは、普通あり得ませんし、当時のユダヤ人の世界では、さらにあり得ないことです。神の掟には、「**あなたの父と母を敬え。**（出エジ 20:12）」とあります。当時のユダヤ人は、いや今でも宗教的な人たちは、不従順で反抗的な息子に対して、葬儀をします。もう息子は死んだのだとして、勘当します。そして、事実、この時点においてお父さんが、息子が死んだとみなしていたことが後で分かります。そして、「**父は財産を二人に分けてやった**」とありますが、つまり父は弟だけでなく、今のこの家を兄息子に全て明け渡したことが分かります。

2C 放蕩 13

13 それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。

湯水のように使い果たしてしまいました。これは、神に対する人間の姿を映し出しています。なぜ父が弟息子に、財産を渡してしまったのか？こんなことになることは、分かっていたはずなのに、なぜ父はそうしたのか？父は、息子を子供としてよりも、一人前の大人として、その自由意志を尊重していたからです。相手の選択を尊重するということは、その相手が一人前の大人、その人の尊厳を認めていることになります。たとえ、それが非常に悪い決断でも、その相手が選ぶことを尊重しなければ、自分との人格的な、真実な関係に至りません。

このことを、神は人間に対して行なわれています。自分は自分のことを行なってきたのだから、神がいるのかどうか分からない、と多くの人たちは言います。そして何か悪いことが起こると、「神がいるのだったら、なぜそんな悪いことが起こるのか？」と言います。それは、神が、真実な関係を持つために、その人が選ぶことを尊重しなければならないからです。無理やり引き止めたら、真実な意味で理解はできません。自分のことは自分でやるという生き方をしているなかで、人生で何か、この放蕩息子のように無駄にしてしまったことはないでしょうか？物だけでなく、大切な関係、大切な価値観など、置き去りにしたことはないでしょうか？

2B 受け入れる父

1C 我に帰る息子 14-16

14 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることに困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。16 彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。

私たちが、今の状況だけを見て、「大丈夫だ、自分のことだけを考えていれば。」と思っている時に必ず忘れてるのは、不可抗力な出来事です。つまり、自分の努力ではどうしようもない状況があります。ここでは激しい飢饉です。そのような想定外のこと、自分が何をした、しなかつたで、どうすることもできないことが私たちの人生に襲います。

ここで彼はあまりにも空腹で、豚の食べる餌さえも食べたいと思ったのに、食べられない状況を描いていますが、これをユダヤ人が聞くと、かなり酷いことです。ユダヤ人は、豚は汚れたもので、食べてはならないと言われているからです。その豚が食べている餌を食べるといことは、本当に屈辱的なことであり、それさえも食べられないということは、ますます屈辱的です。同じように私たちは、自分の栄誉が完全に崩されているところ、恥を見たくない、それだけは勘弁だと思っています。しかしここから、聖書でいう「良き知らせ」、福音の始まりです。そのような恥をかきたくないと思っているけれども、いつもどこかでそうなることを恐れています。しかし福音は、その恐れを締め出してくれます。

17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』

ここで彼は、「我に返って」います。我に返って初めて、自分のしたことに気づき、その罪を憎み、罪を捨てたいと願います。これを聖書では、「悔い改め」と言います。思いを変えることです。

2C 安定した家

彼がここで話していることで、父について大事なことを二つ話しています。一つは、父の家には食べる物があるということです。雇い人でさえ、パンが有り余っていると述べています。父はきちんと、家にいる者たちを食べさせていた、養っていたということです。先ほど話した、父の大きな役割です。養っているということ、また安定しているということです。

そしてもう一つは、父のところに行こうと決めたことです。これは、父のところに行けるということ

思わせていたことです。先ほどのピリー・グラハムの娘、ルツさんがそうであったように、我に返った時に近づけると思えるような両親でした。どうやったら、近づきやすい父になれるでしょうか？その父は、人が脆く弱い存在で、誰もが罪を犯すような存在であることをよく知っている人です。そのことを知っている父であれば、息子がどんなに重い罪を犯したとしても、それでもそのようなものだというを知っているのです、彼を受け入れることができます。息子が調子よい時だけ、父が受け入れるということであれば、息子が罪を犯していた時に、その惨めな姿は父に見られたくないと思うでしょう。けれども、父がだれも罪を犯すものだ、過ちを犯すものだと分かっているから、息子は本当に自分がおっちんでしまった時に、父のところに行こうと決めることができます。

天地を創造された神は、人がはかない存在であることをよく知っておられます。人が自分の頑張りで良くなることはできないことをよくご存じです。ですから神は、人をその正しさではなく、ご自分の憐れみによって受け入れるようにしておられます。放蕩息子を受け入れる父のように、罪深い者たちを受け入れる父となってくださいました。(ヘブル 4:16 参照)

3C 優しい父 20

20 こうして彼は立ち上がり、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。

父は待っていました。なんと、弟息子が離れていた間、彼は家から彼が戻ってこないか、待っていました。そして、彼を見つけた時、父は可哀想に思って駆け寄っています。ここでの可哀想は、腸を表す言葉が使われています。断腸の思いという言葉にあるように、単なる同情ではありません。そして首を抱いて、口づけしています。口づけは、今でも中東の人たちは習慣で挨拶の時にこなっています。しかし、ここでの口づけは、何度も何度も、ずっと続けて口づけをしている姿です。

ここで、放蕩息子は豚の世話をしていた、とても臭い格好であったであろうと思われます。けれども、父はそのまま汚い彼を口づけして抱擁しました。これこそが父、慈悲深い父です。自分を良くしてから父のところ近づいたのではありません。そのままの姿で近づいたのです。これが、神に近づく方法です。

3B 祝福する父

1C 完全な赦し 21-24

21 息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。23 そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

ここで、父の行っていることが二つあります。一つは、完全な罪の赦しです。息子は罪を犯したと言っています。天というのは、神のことです。神に対して罪を犯した生活を送った。そして、直接的に父にも罪を犯しています。けれども、父はそんなことを度外視して、祝宴を開きました。彼は、息子が行なったことなど、どうでもよかったのです。過去は葬り去られました。それを罪の赦しと言います。神の憐れみによって、人は罪が赦されます。

しかし神は正しい方です。父も正義を持っていなければいけません。その正しい基準を引き下げて、受け入れたのではありません。罪の赦しには痛みを伴います。それが、キリストの十字架です。イエスが、ローマの十字架に付けられたという出来事は、あまりにも奇怪であり、おかしなことです。イエスはローマの法を犯しておられませんでした。同じユダヤ人の宗教指導者に、激しく妬まれ、ローマに極刑を要求してそうなったのです。しかし、イエスは死んでから、三日目に墓から出てきました。イエスが何も悪いことをしていなかったこと、また、神の子であることが証明されました。罪ある者を赦すということには、それだけの代償があるのですが、それを罪犯した者ではなく、神本人が身代わりに損害を受けるのです。それが神の子キリストが受けた十字架でした。

2C 息子への回復

そして、父が息子を憐れんで罪赦しただけではありません。息子の地位に回復しています。息子自身は、資格はないと言っていますが、父は、指輪をはめさせ、履き物をはかせなさいと言っています。その指輪とは、父からのものを受け継ぐ息子の印です。ですから、父はただ赦したということだけを行ったのではありません。息子としてくれているのです。これを、聖書では「恵み」と言います。恵みとは、受けるに値しないものを受けます。本当は、裁かれて罰せられなければいけないのに、罪赦されるだけでなく、正しい者に与えられる報いを受けます。そんなの不公平だ！と叫ぶかもしれません。けれども、ここが父の心なのです。父は、寛大な存在です。息子が反抗したからといって、息子の資格を剥奪するのでしょうか？私たちの神は、同じようにキリストに自分の人生を任せる者を、ご自分の子どもにしてください。

4B 兄息子を宥める父

1C 反抗：家に戻らない兄 25-28

25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。26 それで、しもべの一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 しもべは彼に言った。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。』28 すると兄は怒って、家に入ろうとしなかった。それで、父が出て来て彼をなだめた。

弟息子が救われたことを喜んでいますが、今度は兄息子が反抗してしまいました。ここに、また別の反抗があります。弟息子は自分の欲を満たすことによる、反抗でした。けれども兄息子は、妬みの罪、怒りの罪です。真面目な人、自分は一生懸命頑張っているのだと自負している人

は、このようにして父の心を失っています。父と自分との関係は、何に基づいているのでしょうか？自分が一生懸命働いているからですか？いいえ、それはそれですばらしいですが、そのことによって父に受け入れられるのではなりません。神に対しても同じです。自分の良い行いによっては、決して父なる神を知ることはできません。

2C 家から出る父

ここで、父は家から出ていることに気づいてください。弟息子が帰って来た時も、家から出て、見つけたら抱擁して口づけしましたが、同じように、父のほうから出て行っています。

3C 全てを与えていた父 29-32

29 しかし、兄は父に答えた。『ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったことありません。30 それなのに、遊女と一緒に父の財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。』31 父は彼に言った。『子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。32 だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。』

兄息子の問題は何だったのでしょうか？それは、この父の言葉にあります。「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。」父はいつも一緒にいました。そして、財産の分与は弟だけでなく兄に対しても行なわれました。しかし、兄息子はいつまでも、父の戒めを守ることによって受け入れられていると思っていたのです。しかし、父は既に全てを与えていたのです。そして、いつも共にいてくれたのです。つまり、父を兄息子は知っているようで、知らなかったのです。もしかしたら、皆さんの中でこの過ちを犯している人がいるかもしれません。自分が何かをするから、人から受け入れられるのだと思って、いろいろ行なうのです。好かれるために、いろいろなことを行ないます。けれども、恵みに気づいていません。既に、愛されているのです。そして何でも無い普通のところに神がおられるのです。そこに帰って来ませんか？

最後に、弟息子について「だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」と言っています。先ほど言いましたように、もう死んだも同然だったのです。けれども息子が帰って来たのは、生き返りそのものでした。キリストご自身が身代わりに私たちの罪のために死なれました。そして三日目によみがえりました。それは、人が罪の中で死んでいたのに、キリストを信じることによって、その命にあって甦るためです。私たちは、実は死んでいたことが分かる時に生きることができます。自分が生きているのだという頑張りがある時は、その命を知ることはできません。自分のことは自分でやる、自分で生きるのだという人生は破綻している、もうだめなのだ、死んでいるということが分かった時に、十字架に付けられたキリストを見上げることができるでしょう。そして、よみがえられたキリストが自分の罪を葬り去ってくださったことを知るでしょう。